

ききて：茅ヶ崎市楽友協会 小島昭彦

4月21日、京都で黒川侑さんと会ってインタビューをさせていた  
だいた。前日、京都ロームシアター(サウスホール)でヴィヴァル  
ディの『四季』とピアソラの『ブエノスアイレスの四季』のコンサ  
ートがあり、黒川さんはそれぞれの作品(「秋」を担当)でソロを受  
け持っていた。実は、この演奏会では、白井圭さんがコンサート  
マスターを担っていたこともあり、はるばる京都まで聴きに行っ  
てきたというわけである。

—小島：いやあ、昨日の黒川さんのソロはよかったですよ！  
黒川(以下、YK)：ああ、そうですか。ありがとうございます！

—あの、何て言ったらいいのかなあ、ヴィヴァルディ『四季』なん  
か、もちろん何度も聴いてるし慣れきっちゃっているのに、すごく  
新鮮でしたね。『秋』の最初のところのソロのヴァイオリンの音と  
いうか響かせ方というか、何か工夫して出していましたか。いつ  
もの音の感じとは違うふういきこえたので。

YK：昨日はみんな、あんまりオールドファッションな感じで弾く人  
はいなかったんで、そういう意味では、ちょっと違って聴こえるこ  
ろはあったかもしれません。

—『四季』では、基本的にはソリストがテンポを決めていく感じで  
したか。

YK：そうですね。みんなソリストが自分で決めていきました。

—それで、コンサートマスターの白井さんが、みんなの方向をま  
とめた感じでしょうか。そうすると、ソリストの個性がそこで感じら  
れるような演奏になるわけですね。

YK：本当にそうでした。

—ほんと、聴きごたえがありました。アンサンブルの皆さんが黒  
川さんのソロと一体化しているのがよくわかりましたし。

YK：ぼくは元々共演する方々と一緒に弾いてつくっていくのが楽  
しいタイプですし、今回オーケストラの質としても、ものすごく和気  
藹々とした素敵な雰囲気で、なおさら楽しかったでしたね。

—僭越ながら、私は、昨日終演後黒川さんにお会いしたときに、  
「よく勉強してますね」などと言ってしまいました。さあ、ここからイ  
ンタビューらしくなるのですが、そもそも演奏家が「勉強する」と  
いうときに、黒川さんはどんな勉強をなさっているのでしょうか。  
例えば、初めて作品と出会ってから、本番で演奏をなさるまでの  
間にどんなことを積み重ねていくのか教えていただけませんか。

YK：ぼくの場合積み重ねるという意味では、技術的なことや音楽的  
なこともちろんですが、例えば他の芸術分野の本を読んで、練  
習しながらそういえばこの曲の時代こういうことがあったとかこう  
いう雰囲気もあるかもとか、ちょっとずつ音楽と繋がっていくとい  
いなどと思って進めていくのは楽しいですね。タイプとして有機的に  
勉強していくというよりは、少しずつつまむようなかたちで進めて  
いった方が結局色々早い方なので、すぐにアウトプットみたい  
なことができるわけではないのですが。

—最初は楽譜をじっくり読むとか、そういうことはするんですか。

YK：楽譜はやっぱり読みますね。スコアもあわせながら。

—今回、藤沢では白井さんとヴァイオリン・デュオで演奏なさる  
わけですが、このようなときって、黒川さんは相手パートの部分  
も実際に弾いてみたり、分析してみたりというようなことはなさ  
っていますか。

YK：そうですね。特に今回共演相手が同じ楽器だけなので、譜  
面を見ているといろいろと面白く感じています。

—イザイの2つのヴァイオリンのためのソナタはいかがですか。

YK：イザイのヴァイオリン1本のためのソナタから、2本のための  
ソナタになると、共通する部分もありながら音楽の膨らみ方は全  
然違うんですよ。ちょっとびっくりしましたね、イザイはこういうふう  
に音楽を考えていたんだと。

—ほんとうに演奏される機会が少ないですよな。

YK：ないですね。難しい曲だと思います。でも、作品としてはす  
ごく面白いです。いや、もうまるで技巧的にはコンチェルトのような  
譜面なんですけど、ヴァイオリン2本であそこまでよく音楽が構築  
されていくなっている感じがすし、お互いに受け渡しもすごくあつ  
て…。

—そうなんですね。でも、それだけにやりがいがありますね。

YK：はい、やっぱり弦楽器だけっていうのは、独特のアンサンブル  
の雰囲気があるので楽しみですね。

—ところで、黒川さんはベルギーで勉強されたのでしたね。そこ  
でイザイについて学んだことはあったのですか。

YK：そうですね。イザイが結婚式を挙げた教会というのがすぐ近  
所にあつたし、イザイ自体も弾くことはあつた。天候だとか  
建物の感じだとか、ベルギーは同じフランス語を使うにしても、フ  
ランスとはずいぶん違うところがあつたし、イザイの曲を聴くと、  
ベルギーの家や雰囲気をなんとなく感じるところはありますね。言  
語って、例えば、ドイツ語でもドイツとウィーンでは全然質が違  
いますし、フランス語もフランスとベルギーではちょっと差があり  
ます。

—現場で実際にものを見るとか体験するとか、あるいは何かを  
感じるって、音楽には繋がってくるとお考えですか。

YK：それはあるでしょうね。人の生活が目に見えちゃうっていうのは、  
ぼくにとっては大きいです。

—黒川さんは、そもそもどのようなきっかけでヴァイオリニストを  
めざしたのでしょうか。

YK：元々3歳くらいからピアノをやっていて、ピアノの発表会  
の時にヴァイオリンを弾いている子がいて、そっちの楽器のほう  
がやりたいと言ったという話なんです。ぼくは全然覚えていま  
せんが、5歳のときだったみたいです。

—それで、ヴァイオリンに？

YK：そうですね。小3くらいまでは並行してやっていたんですが、途  
中からヴァイオリンに完全に移行したみたいです。笑

—練習とか嫌になったことはなかったのですか。

YK：練習が苦になることは今でもあんまりないので、いつまでも  
やっていますね。

—なるほど。では、プロの音楽家を目指そうと思うようになったタ  
イミングのようなものはあったのでしょうか。

YK：特別にこの時期に、プロになります、というようなことはあまり  
考えていなかったですね。

—では、コンクールで優勝したりというようなきっかけは大きいで  
すか。

YK：活動のきっかけとしては割と大きいでしょうけど、心理的な  
きっかけとしては、そこが大きなスイッチになったっていうことでは  
ないと思います。

—藤沢での曲目について、簡単にお話しいただきたいの  
ですが、プログラム構成とか曲の流れだとか、出演者としてお考えに  
なっているところはありますか。

YK：イザイは、やはりバッハの無伴奏ヴァイオリン作品に強いイン  
スピレーションを受けています。ですから、今回のプログラムで  
も、これは白井さんのアイデアだったのですが、バッハのバル  
ティータ第3番と、そのパッセージが引用されているイザイの無  
伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番との比較も面白くお聴きいただけ  
ると思いますし、先程も言っていたイザイ自身のソロ・ソナタとデュオ・  
ソナタの違い、またもちろんバッハとイザイなどで大きく違う音楽  
的な質感も含め、それぞれを比較して聴くことができるのは演奏  
する側としてもとても楽しみにしています。

—黒川さんは、今、無伴奏を積極的にやっているんですか。

YK：バッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタをCD録音する予定で、勉  
強しているところです。バッハ、こんなにすごい曲なのかと、練習  
しながらでも何度でも思わせられる気がします。バッハは本当  
にとつもない作曲家なんですよな。

